ひまわりからのメッセージ
23号
2013.2.12
西濃圏域
発達障がい支援センター
ひまわり
発行人：中野たみ子

忠告

先日、ある方から忠告をいただきました。その内容は申し上げられませんが、私の生き方に関わることでした。

私の年齢になると、感謝のことばやほめことばをいただくことはあっても、まず、忠告や諫言はありません。言ってくれる友人はあっても、友人以外の人からそういうことばを受けることは、まず無いと言ってもいいでしょう。私より十歳以上お若い方ですが、今の私の生き方を言い得て、さすがだと思い、ありがたく思いました。

そのことがあって、私は短歌の師のことを思い出しました。宮中歌会始の選者もつとめた人物でしたが、非常に厳しい人でした。師は、短歌を態度の文学と考えておられましたから、作品は即ち生きる態度につながるものとされました。私は残念ながら一度も師にほめていただいたことはなく、推敲した作品を持って上京しても「ウーン、駄目だね」と返されるのが常でした。

弟子に対する厳しさは、師自らが自分自身に課した厳しさでもありましたから、その生き方に学ぶことは、本当に多くありました。常に礼儀正しく、筋を通し、自分を律しておられましたから、不肖の弟子である私は、どんなに叱られたことか、思い出しても申し訳ないことばかりでした。

そんな師が亡くなって一年六ケ月。私はいつのまにか傲慢になり、自分自身に甘い人間になり果てていたのでしょう。他人から見れば「お前、何様のつもりだ!!」といったところでしょうか……。子どもたちに良かれと思って、自分自身を自分の思いで縛りつけていたのかもしれません。いくつになっても、まだまだだなあと思いながら、忠告してくれる人のいる幸せを思いました。

あなたにも忠告してくれる人がいるといいですね。

就学そして年度がわりに
「支援の引きつぎを……！」

岐阜県の教育委員会でプロフィールブックが作られたのは何年前だったでしょうか？　A五版の大きさで、かばんに入れやすい大きさに作られたのですが、保護者の方たちは、「小さすぎて……」と言われ、それならば、各自治体で考えればいいということになって、少しずつ作成する自治体がふえてきているようです。

大垣で「スマイルブック」と名づけられ、神戸では、「神戸スマイルブック」、養老でもことばの教室を中心に作られているようです。

しかし、本当にこのブックが理解されているのかどうかというと、必ずしも理解されているとは言えないように思います。

お母さん方の中には、「うちの子は障がい児だから作らされた」と思っている方があります。そういう方は「もう、持ちたくない」とおっしゃいます。又、幼児期から学校へつないでも、学校でずっと預ったままになっていて、「どういう使い方をしていくといいのでしょうか？　学校からは何も言ってもらえません」と言われる方もあります。障がいがある、無しにかかわらず、支援プロフィールブックは、まず子どもたちが助かるものでなければ意味がありません。私が持つことを勧めるお子さんは、殆どが個人内差のあるお子さんです。勉強はできるけれども行動面での落ちつきのなさや集中力のなさが本人の困り感としてあるという子もいます。ことばから推理していく力の弱さがあるために先生の話が理解しにくい子もあれば、聞く力や見る力の弱さがあるために困っている子もいます。そういう子どもたちにとって大切なことは、「支援の引きつぎ」です。私たちは誰でも、その子を担任する時に、課題を教えてもらっても、何の解決にもなりませんね。その子を観察し、色々な手段を使って理解するまでに多くの時間を費すことになりますから……。でも、前年の担当者が「○○という方法

を使ったらうまくいったよ」「△△というアイテムでやってみたら成功したよ」と教えて下さったら、全くの白紙からのスタートではなくなりますよね。つまり、「うまくいった」ことは、その時の担当者が上手な支援をしているからなのです。

うまくいくばかりではない可能性もあります。それも次の担任の先生に引きついでもらえるといいと思うのです。そして、お母さんたちにも、わかってもらえるように、ほんの二、三行でも伝えてもらうことが大事だと思うのです。

先述のように「もう持ちたくない」というお母さん以外にもどう使っていいかわからない人は多いのではないでしょうか？ 担任の先生から「もう必要ないのでは？」と提案される方もいらっしゃるかもしれません。けれど、今の担任の先生が上手く支援して下さったから良かったのであって、担任が代わって全く別の方法をとられた時に果たしてどうなるのか……そんなことも考えていくべきでしょう。

担任の先生がお忙しくて一年経ってもファイルに何も加わらないということも起きるかもしれません。（本来は個別の指導計画や個別の教育支援計画が加わっていくのが理想ですが……）その場合には、担任の先生に伺って、配慮していただいたことや、残っている課題などをお母さんが書いてファイルに閉じていきましょう。その時々のお子さんの歩みが、実は十年後、二十年後につながっていきます。

私の教え子の中には、小学校時代のある事件がきっかけでパニックを起こすようになり、一時はおさまったにもかかわらず青年期になってタイムスリップ現象で苦しんでいる人もいます。就職先に支援がきちんと引きつがれていれば……と思うと残念で仕方ないのですが、「途切れのない支援」とは、そういうことなのです。

プロフィールブックをお母さんが持って、お子さんの情報を全てファイルしておくことは、お子さんの成長記録でもあります。大きくなった時に、自分がどんなに大切に見守られ育てられてきたのかを知ることは、お子さんにとっても生きていく財産になっていくのではないでしょうか。

生活を見直して

私は、よく講演の依頼を受けます。親の会だったり家庭教育学級であったり、保育士さんや支援者の会だったりします。話し終えた後で、「ああ、あれも話さなかった」「もっと○○について話せば良かった」と後悔することが実に多くあります。

今回は、生活を見直してみようと思います。

まず、朝起きた時、「おはよう」と家族で言えているでしょうか？「早く起きなさい！」「早く着がえて！」「早く食べて！」と、早くということばの連発はあっても、「おはよう」のあいさつが出来ていない家族は多いのではないでしょうか？

次に、園や学校に行くまでの準備ですが、ここがお母さん方の頭痛のタネですね。「なかなか準備ができなくて…」と言われるお母さん、思い返してみて欲しいのです。「ジブンデ……」と、何でも自分でやりたがった時期はなかったでしょうか。おそらく、あったと思います。そして、時間がかかっても自分でできたことをほめてあげたでしょう。けれども、子どもが自分でやりきるには時間がかかります。食べることも着ることも、子どもがやりきるのを待ってあげることが、その後のお母さんはできましたか……？待つことができましたか？

今、しまったと思われたお母さん、そうなのです。お母さんが「待つ」ことを放棄した結果、「やらなくても、どうせママが手伝ってやってくれる」という気持ちをお子さんに植えつけてしまったとも言えます。「遅くなったらママに車で送ってもらえばいい」と思っている子もいるかもしれません。準備に時間のかかる子は、もっと早目に起こして、周りに子どもの興味をひくようなもののない場所（テレビをつけっ放し、ゲームが近くにあるなどは問題外ですね）で、自分で時間をかけてでもできるようにしていきましょう。「うちの子は気が散るんです」と言われるなら、気が散りやすい物を片づけてあげませんか？自立を妨げているのは大人の方かも……？

「早く！」ということばも、実は全く具体性がありませ

ん。「〇〇分までに」と具体的な時間の呈示が必要でしょう。継次処理といって、「～の次に～して、次に～して…」と順序立てて考えて行動するということの苦手なお子さんに、「三〇分の間に～と～と～をして！」という指示は、全く効果がありません。自分の子どもがどんなことばなら分かるのか、どんな呈示の仕方がいいのか、お子さんの特性を知っておくことも大事です。

このことは、園や学校とも連携が必要なことでしょう。

さて、園や学校への行きしぶりには、どのように対処したらいいでしょうか。子どもたちの言う「イヤ！」は、多くの意味があると思います。勉強がわからない、友だちとの関係で困っているということもあるかもしれませんが、自分の好きなことは頑張るけれども、いやなことはやらないというお子さんもいると思います。私は、「自分に折り合いをつける力」の弱いお子さんだと思うのですが、お母さんに聞いてみると「家では何にも問題ありません」と言われることが殆んどです。

「家で好きなことをやっていればおとなしい」「親の言うことなんて聞きません」とおっしゃるお母さん、それはまず家庭のルールを作ることから始めましょう。家庭で、まるで王様のように自分勝手にふるまい、お母さんを召使いのように従わせているお子さんが、学校の生活にうまく適応していくことは至難のわざと言えます。そして、学校へ行っても別室でその子のやりたいことだけをしているということになれば、おそらく将来の社会的自立は、かなりむずかしいと言わなければなりません。

「ゲームは何時に終わる？」「ずっと…」「時間を決めて」「じゃあ八時」「でもお母さんは七時三十分には終わってほしいな」「ダメ！八時」「じゃあ、まん中をとって四十五分にしようよ」

つまり、相手と話しながら自分で決める、そして決めたことを守らせるということが大事でしょう。ここは、ゆずってはいけない所です。

もしも小学生のうちに、それができないと、中学でも大学でも、大人になっても……と覚悟が必要でしょう。学校が何とかしてくれる、園でやってもらう等々他人まかせにすることではなく、まず家庭ですべきことを見直してみること、ご両親、ご家族で話し合っていくことが

結局はお子さんの自立に向けての中心課題だといえますね。

とはいっても「園でくをして困ります」「学校では○○という行動が見られます」というように集団の場面でのお子さんの様子を聞くと、ついつい「何でうちの子ばっかりが…」という気持ちになることもあると思います。しかし、子どもの行動に意味のないものはありません。

その行動は、いつ、どんな状況のもとで起こるのか。相手はいるのか、その行動の誘因となる背景にはどんなことが考えられるのか、……集団の中で見ていると、私たちはつい「いつも、こういうことをします」ということばで片づけてしまいがちですが、決してそうではないと思うのです。もしかしたら、友人のことばであったり、先生の励ましのことばであったり、廊下のざわめきであったりするかもしれません。朝、出かける時のお母さんとのやりとりが誘因だったり、朝食を食べてこなかったことであるかもしれません。子どもの行動の分析をしてみることは、まず必要なことですね。家でも園でも学校でも同一歩調がとれるといいと思うのです。

そして、何といっても大切なことは、「親が言うから…」「先生に叱られるから…」「お父さんがこわいから…」と、人に言われて、いやいや従うのでなく、自分で気づけるようにしていくことです。ことばのかけ方一つとってみても、「〜しなさい！」「まだ〜してないでしょ！」ではなく、「忘れていることなかった？」の方が本人が考えられるかもしれませんよね。

青年になっても自分で決められない人は意外に多いのです。それは、青年になったからといって、すぐに出来るものではないのです。小さい時から先を見通して積み上げていく力なのではないでしょうか。

お知らせ

- 三月の親の会は、大垣のスマイルブック引きつぎのため、学校訪問があり、休会です。
- 三月二十八日（木）午後一時三〇分〜キッズを行います。